

『児童研究（日本児童学会編）』の歴史に関する研究（文献研究）

藤井 佳世（教育学科・講師）	小泉 裕子（児童学科・准教授）
柴村 抄織（教育学科・准教授）	鈴木 樹（教育学科・准教授）
田爪 宏二（子ども心理学科・准教授）	平井 悠介（児童学科・講師）
松田 広則（児童学科・准教授）	米山 弘（児童学科・教授）
大滝世津子（東京大学大学院博士課程）	

1. 研究目的

明治31年11月3日に発行された『児童研究』（大正15年4月から日本児童学会により発行）は、現在に至るまで子どもに関する幅広い研究成果を発表している。『児童研究』の特徴は、児童に関するさまざまな分野の専門家による研究によって構成されている点にある。しかし、このような『児童研究』の歴史的価値に関する研究はおこなわれていない。そこで、本研究では、『児童研究』を一次資料として、日本の教育史とのかかわりや個別なテーマとのかかわらせながら、『児童研究』の歴史的意味を明らかにすることを目的とする。

2. 研究計画（平成20年度・21年度）

- ① 明治から現在に至るまで刊行されている『児童研究』の全体像を把握し、各研究者が分析する視点を抽出する。
- ② 各研究者が分析視点にもとづき、『児童研究』を解読する。それにより、『児童研究』の歴史的・教育学的価値を明確に示す。

3. 平成20年度の研究成果報告

『児童研究』の全体像を把握するために、各研究者が分担し、資料整理、資料の共有化、分析視点の抽出を行った。各巻の報告は次の通りである。

『児童研究』第1巻（明治31年）～第6巻（明治36年）

柴村 抄織

日本児童学会編『児童研究』の歴史に関する研究として、平成20年度は、第1巻（1号～10号）、第2巻（1号～10号）、第3巻（1号～10号）、第4巻（1号～10号）、第5巻（1号～10号）、第6巻（1号～12号）と、合計62冊の概観と分析とを行った。

明治31年～36年の社告、特報は、「教育者に告ぐ」を始めとして、各所に、社会全体への貢献と責務が意識されている。また、表紙の後に「題歌」があり、児童に関連する、詩、和歌、短歌、俳句、漢詩などが、印象深く掲載され、発刊の辞、祝辞、就任の辞には、児童学の発展を願う堅固な意識がみられる。

第5巻8号（明治35年10月）には、「日本児童研究会の創設に就きて」の原稿掲載があり、日本児童研究会会員募集を行い、その後、日本児童研究会入会者報告が行われてゆく。各号に「教育界彙報」があり、当時の教育事情が記録されている。

児童文学では「教育的俳句と子守唄」「家庭と童話」、古書にある児童学全般の収集など

があり、言語では、「作文」「ことわざ」「児童の詠歌」「児童の詩想」「方言」等、地方からも資料を収集している。また、民俗学では迷信を中心としている。その他に、「読書科」「青年の読み物」等、広告に「桃太郎」「お伽話」「児童研究文庫」等があり、児童文学史としても資料となるであろう。

それから、教育学、「児童の心的傾向及びその変動に関する研究」のような心理学の他に、児童の遊戯、道徳、倫理、宗教、女子教育があり、音楽では、「子守唄」「唱歌」「俗謡」「手毬唄」「童謡」があり、美術では「児童画」が掲載されている。児童学全般を網羅して、体系的に整理分類する過程がみられる。

研究テーマの継続性としては、国文学関連で分析、精査し、国文学者の掲載原稿について、研究を行う。他に数項目を考慮している。平成21年度は、『児童研究』の分析、解説、調査、資料作成を行い、『児童研究』の歴史的・教育学的価値を明確に位置付ける予定である。

『児童研究』 第7巻（明治37年）～第12巻（明治41年）

田爪 宏二

この時期の児童研究は児童研究の専門誌として、月刊で刊行されている（第11、12巻は隔月刊行）。科学的な児童研究と共に一般の読者に対する啓蒙誌という側面も持ち合わせていると思われ、図書の紹介や一般読者からの寄稿もみられる。

研究論文の分野としては、主に心理学、児童心理学、教育心理学、教育学、教育病理学、教育治療学、教育衛生学、生理学、学校衛生学に分類され、各分野の研究論文や論説が掲載されており、多領域において専門的な研究が取り上げられている。社会と児童教育との関連や戦時下の状況を反映した文章もみられ、学際的な視点も垣間見ることができるといえる。この時期の日本児童研究会の会長は元良勇次郎、児童研究の編集長は高島平三郎であり、役員には倉橋惣三も名を連ねている。元良、高島はいずれも心理学者であったため、掲載される論文も心理学やその周辺領域に関するものが多く見られる。また海外の研究者からの寄稿や海外論文の翻訳等も掲載されており、国際的な視野に立った雑誌であったと考えられる。これは元良、高島が海外の研究者との交流があったことによるものであると思われ、特に米国の心理学者スタンレー・ホール（Hall, G. S.: アメリカ心理学会（APA）初代会長）との交流が伺われ（例えば、1910年に元良はホールの「青年期の研究」の翻訳書を出版している）、彼の肖像や論文、彼の理論に関する研究論文が多く掲載されている。

『児童研究』 第13巻（明治42年）～第15巻（明治44年）

大滝 世津子

児童研究13巻～15巻は、明治42年～44年に刊行されたものである。明治43年、日本は韓国併合を行ったが、その影響はあまり見られない。また、明治37年に始まった日露戦争の影響もうかがえず、戦争に関する記載はほとんど見られない。

人物としては倉橋惣三、高島平三郎などの著名人が名を連ねている。また、東京女子大学の二代目学長を務めた安井てつの名前も見られる。

この時期には心理学、教育学、教育病理学、特殊教育、教育治療学、学校衛生学、教育衛生学、児童衛生学、人種衛生学、社会衛生学、人類学、生理学、小児科学、家庭、といったさまざまな分野の論考が見られる。医学的な分野の論考が比較的多かったため、執筆者の肩書も「医学博士」というのが最も多く見られる。この時期ならではの論考と思わ

れるものとしては、日本郵船の船員の子どもが父親にろくに会えず、懐かない、などが見られる。また、児童の「性欲」についての論考も散見される。一方で、今日でも問題視されている「自殺」や「飲酒」の問題がすでに扱われており、これらの問題の根の深さを感じさせる。

また、まだ日本において女子大学も誕生していなかったこの時期にしては多いと思われるほどの、女子教育に関する論考や雑誌広告が見られる。論考題目の一例としては「男女共同教育」「女子教育ト人種衛生」「女学生ノ月経」「少女の自白」「不良女子ノ収容所」「飲酒ト女子教育」などがある。雑誌広告としては『新婦人』『女子教育』『家庭及び家庭教育』『處女生活』『婦女界』などが見られ、女子教育に関する議論の盛り上がりが見える。

『児童研究』 第16巻（大正元年）～第21巻（大正6年）

小泉 裕子

『児童研究』第16巻第6号において、学会会長であった元良勇次郎の訃報を知らせる弔辞が幹事高島平三郎によって記されており、そこには、児童研究の開拓者としての元良先生が、アメリカに遊学しスタンレーホール氏に就いて心理学を研鑽し、本学会の創設に至ったことが記されている。当時、すでに学会員が1500名いたことまで記されているのは興味深い。また、大正元年から大正6年までの目次を見ると、高島による「児童学」講義が掲載されることなどから、日本における児童学の普及が盛んであったことが伺える。また、海外の論文の紹介が「摘録」としてとりあげられているのも特徴である。

大正から昭和にかけて大きな影響力を持っていた倉橋惣三が、この児童研究の幹事として参加している。第16巻から21巻までの幼児教育（保育）に関連するものを列举すると、第17巻で倉橋惣三の「児童の生活の特色」2回掲載、牟田孝海の「幼児の嫉妬心に就いて」、寺田精一の「幼児と迷信」、第18巻では「我国幼稚園教育の当面の問題」、矢島鐘二の「保姆諸君に告ぐ」、小山ヒデの「我国在来の玩具を幼稚園恩物として応用す」、「幼児が玩具類を幼稚園に持ち行くことについて」、第19巻では望月くに著「幼児の言語調査」、評論「幼稚園の教育を重んぜよ」「託児所設立の急務」、第20巻では、高島平三郎「子供の喧嘩について」「幼児の早熟と神経過敏性に就いて」、竹内薫兵「三四歳頃のコドモノ食物」、第21巻では大西義衛の「幼稚園児道の貨幣と色彩に関する知識に就いて」、富士川一吾の「小児の保育に関する俚諺俗説」（2回）が掲載されている。大正初期は、幼稚園の単独法令（幼稚園保育及び設備規程：1899）が制定され、恩物を中心とした保育の在り方が徐々に見直されている時にあるが、児童研究の中にもその傾向が表れているといえよう。倉橋らを中心に幼児の姿を、ありのままに見ようとする傾向や心理学的考察をふまえた幼児理解などがみえる。一方、全国的に幼稚園保姆の養成に関する動きが有る中、「児童研究」にも倉橋、矢島ら保姆の資質向上にむけた講義や論説が掲載されている。

『児童研究』 第22巻（大正7年）～第30巻（大正16年）

藤井 佳世

ドルトンプランやプロジェクト法などの新教育に関する紹介や説明、論考が見られることが特徴的である。ほかにも、フレーベルやヘルバルトに関する考察、ディルタイやカントなどの哲学にもとづく考察の紹介などがみられる。

また、諸外国の教育に関する考察や情報が多く掲載されていることも特徴的である。例

えば、第22巻では、「アメリカに於ける児童保護施設の二三」という講演内容が記されている。各巻には、諸外国の研究者の著書の内容が紹介されており、当時の諸外国における研究内容や研究の視点を知ることができる。さらに、雑録に「独逸児童の貧血症増加」などの状況報告が掲載されており、諸外国の教育状況や子どもたちの状況を知ることができる。とりあげられている国は、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリス、イタリアなど、欧米を中心とする諸外国である。

役員一覧をみると、第22巻から第30巻までの日本児童学会の会長は片山國嘉であり、主幹は、高島平三郎と富士川遊である。専科委員には、「心理学」「児童心理学」「教育学」「教育病理学」「教育衛生学」「学校衛生学」「小児科学」「生理学」「特殊教育学」の分野が設定されている。『児童研究』に掲載されている内容は、これらの分野とほぼ重なっている。そのため、子どもの身体や健康に関する考察が多方面からみられ、「睡眠」に関する考察が継続的になされていたように思われる。教育学に焦点をしばってみると、専科委員には波多野貞之助、大瀬甚太郎、乙竹岩造、吉田熊次、谷本富の名がある。評議員であった樋口長市の論考も掲載されている。学校に関する考察として試験に関する内容があり、「国家」「デモクラシー」「社会教育」などの時代を象徴する言葉が散見される。

『児童研究』 第31巻（大正17年）～第40巻（昭和19年）

松田 広則

31巻から40巻までを通じて、主な内容は「論説」、「叢談」、「摘録」や「新刊書紹介」などで構成されている。つまり、一般的な論文を掲載するという形式ではなく、研究内容や研究者、書籍などの最新情報を提供していく役割もあったのではないかと考えられる。例えば、叢談には「出産に関する祈請及俗信」というタイトルで連載されている時期もあり、新生児の死亡率が比較的高かった時代に冷静かつ適確な対応を広めていく目的があったのではないかと考えられる。

また、担当部分では36巻以降に分類がなされていなかったため、35巻までのみの分析となるが、「摘録」に関しては雑誌内に内容によって分類された分野別に掲載されていたので、分野別に掲載されている割合を算出してみた。その結果、全391タイトルのうち、心理学についての掲載が最も多く36.8%であった。次いで児童学であり（20.2%）、3番目が学校衛生（13.3%）、4番目が教育（7.9%）、5番目が生理学（7.7%）、6番目が児童保護（6.9%）という割合であった。このように児童学だけではなく、心理学や医学系（衛生学・生理学）、教育学などの内容について多く論じられている傾向があり、これらは36巻から40巻までの正確な分類はできないが、同様の傾向を示していた。

論説や叢談のタイトルで特徴的であったのは、前半は比較的目立っていたのは児童の不良行為に関する事であった、また後半には小児や児童の栄養状況に関する内容が多くなっていた。これらは、39巻に「世界大戦後の児童保護」というタイトルがあるように、戦争の影響による食糧事情を反映した結果と考えられ、中盤から後半にかけては児童の体力問題について触れられているのも戦争による影響があると考えられる。

『児童研究』 第41巻（昭和20年）～第65巻（昭和61年）

平井 悠介

戦後の日本児童学会は、児童の健全な育成のための条件整備を求めて、政府関連部局に対し意見書を提示することが数度あった。例えば、第43巻第3・4号（昭和22年）に「児

童の福祉増進に関する日本児童学会の意見書」を掲載し、厚生省に「児童局」を設けること、関係各省部局と連絡をとり、児童養護に関する総合的な施策を実行することを要請している。また、当時社会問題化していた浮浪児問題に対し、心理学、教育学、精神医学、小児科学、社会学、各専門家を委員とする「浮浪児対策委員会」を設け議論し、16条に及ぶ提言として「浮浪児対策に関する意見書」を第44巻第3・4号（昭和23年）に掲載している。さらに、第49巻第2号（昭和36年）では、「児童権利宣言」についての決議」を掲載、宣言の趣旨を広く周知するとともに、非行青少年の増減の問題への対策、社会保障の徹底、保健対策の充実などの児童対策が実施されるよう要請している。

こうした政策への提言のほか、第45巻第7・8号（昭和26年）には「児童憲章」の全文を掲載し、児童福祉の普及・促進活動をも行っていた。

昭和30年代になると、児童福祉の増大に関与するのみならず、教育分野への提言も多く行われる。特に、時代状況を反映し、道徳教育をめぐる議論が散見される。第48巻第1・2号（昭和33年）では、学会による論説「道徳教育」についての考え方」を掲載、学会としての立場を表明する宣言文を出している。

昭和40年代ごろから教育と福祉が統合的に論じられるようになり、昭和50年代に総合科学としての「児童学」が確立されてくる。それは、第54巻第1号（昭和50年）掲載の平井信義「児童学とは何か」、第55巻第1号（昭和51年）掲載の平井信義「児童研究の過去・現在・未来について」をきっかけとしている。

『児童研究』 第66巻（昭和62年）～現在

鈴木 樹

1985（昭和60年）4月より、高城義太郎（玉川大学教授・当時）が会長となった。その当時の学会や『児童研究』などの基本線は、今日までほぼそのままの形で継承されている。

第66巻（1987年）には、小山望・吉田瑞穂・広田香代・岡本美智子「『こどもの城』の保育活動の計画と実際」、佐藤郡衛「『いじめ』の集団過程の分析——学級風土と『いじめ』——」が掲載されている。東京・青山に「こどもの城」が開設されたのは1985年であり、1986年2月には「葬式ごっこ」が行われたとして有名な中野富士見中学いじめ自殺事件が起き、いじめが社会的な問題となった。1992年（第71巻）には大塚玲・井田範美「わが国における学習障害に対する教育の動向」、第75巻（1996年）では「特集」として「少子化における児童健全育成の課題」というテーマによる2件の論文が掲載されている。第75巻には須永進・渋谷百合「子どもへの虐待と対応システムに関する研究——米国・マサチューセッツ州の現況——」も掲載されており、時代に対応した児童学のテーマが取り上げられている様子が窺われる。

一方、加藤翠「わが国における児童学の科学および教育体系への導入の推移と問題」（第71巻・1992年）、荒川志津代「女性雑誌にみる育児情報とこども観（1）——要因分析による女性雑誌の分類——」（第73巻・1994年）、高城義太郎「鎌倉女子大学『児童学部』の創設について」（資料、第82巻2003年）など、児童学、児童観（子ども観）というテーマが掲載されているのも、『児童研究』ならではの特徴である。

第85巻（2006年）からは、「日本児童安全学会論文」と「国際ムーブメント教育・療法学術研究センター論文」が掲載されており、児童の安全、ムーブメント教育・療法に力を入れる学会の基本姿勢が現れている。

4. 今後の展開

平成20年度の研究成果をもとに、来年度は、各研究者が分析視点にもとづき、『児童研究』の解説をすすめ、歴史的・教育学的価値を明確に示す予定である。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究『『児童研究（日本児童学会編）』の歴史に関する研究（文献研究）』の平成20年度中間報告である。